

「国際歴史探偵」の20年

——世界の歴史資料館から

加藤 哲郎

はじめに——マルクス主義国家論から国際歴史探偵へ

- 1 原点——1972/73年の東ドイツ留学
- 2 旧ソ連秘密文書＝ロシア国立社会政治史文書館
- 3 アメリカ合衆国・国立公文書館
- 4 在独日本大使館員・崎村茂樹の戦時亡命
- 5 日本にも眠る歴史資料，中国研究の困難

おわりに——若い世代へのメッセージ

はじめに——マルクス主義国家論から国際歴史探偵へ

インターネットで現代史研究

ご紹介いただきました加藤です。今日は伝統ある法政大学大原社会問題研究所の所員総会のあとの記念講演ということで、やや緊張していますが、よろしくお願ひします。

大原社研のウェブサイトOISR.ORGは、日本では先駆的で、今日でもきわめて充実した研究・資料サイトとして有名です。日本でインターネット元年と言われるのは1995年の阪神大震災，オウム真理教事件の頃ですが、その頃から二村一夫先生が大きいホームページ・アーカイヴを作りまして、私もウェブ発信を始めました。二村先生が『二村一夫著作集』をウェブ上に開設し、五十嵐仁さんも加わって、大原のホームページを充実させて、今日の「転成仁語」になるご自身の定番ブログを作ってきました。私のホームページ「ネチズン・カレッジ」は、それらに学んで、学術情報を蓄積し発信してきました。

私が今日お話しする現代史研究を始めたのも、インターネットを使うようになってからです。もともと1970年に大学を卒業後、どちらかというと政治学の理論，マルクス主義国家論を研究してきました。冷戦が終わってソ連が崩壊した1990年頃から、今日お話しする歴史研究を始めました。『モスクワで粛清された日本人』（青木書店）や『国境を越えるユートピア』（平凡社）は、1990年代にロシアで見つけた旧ソ連秘密資料にもとづいて書いたものです。

そして、ソ連の問題は20世紀でほぼ卒業し、21世紀には、主としてアメリカに通うようになりました。アメリカの国立公文書館のさまざまな資料にあたって、2005年の平凡社新書『象徴天皇

制の起源』とか、もともとやってきた研究の集大成ですが、2008年に『ワイマール期ベルリンの日本人』（岩波書店）を書き、つい最近2013年末に『日本の社会主義—原爆反対・原発推進の論理』という岩波現代全書を出しました。この『日本の社会主義』は、いわば理論的なものと歴史的なものとのミックスで、普通社会主義についての本とは違って、核エネルギー、原爆及び原発について日本の社会主義がどう見てきたのかを、歴史的にトレースしたものです。

その過程で、私を「国際歴史探偵」と最初に呼んだのは、五十嵐さんのブログ「転成仁語」だったと思うのですが、そのあと私自身も、ウェブ上で名乗ることにしました。皆さんにお配りした2011年3月7日の共同通信インタビュー記事「国際歴史探偵」は、その後の資料収集や関係者のインタビューのさいに、名刺代わりに使っています。

割と気に入っているのは、東京大学の加藤陽子さんが、『UP』という東京大学出版会のPR雑誌第463号（2011年5月）に書いてくれた紹介です。東大出版会『日独関係史』寄稿論文への書評ですが、「東にコミンテルン文書ありと知れば、出かけて行って、日本共産党創立時の綱領を発見し、西にOSS（米国戦略情報局）の文書があると分かれば、出かけて行って、1942年の米国機密文書『日本計画』を発見する。加藤氏の真骨頂はこのあたりにあり、『ネチズン・カレッジ』上では、加藤氏にかかる資料、論文、データベースのほとんどが読めるようになっている。その豊穣さと配慮には、敬服させられる」という評をいただき、それなら自分でも名乗っていかということで、五十嵐さんの勧めもあり、今回初めてタイトルにしました。

大原社研HP『二村一夫著作集』を目標に

私が目標としたのは、大原社研ホームページの『二村一夫著作集』で、私のホームページ「ネチズン・カレッジ」には、単行本は入れていませんが、論文やエッセイの形で発表してきたものは、新聞・雑誌の場合は基本的に発売終了の2週間後、編著に入っている論文でしたら3ヶ月以上たってから収録するという形で、自分の著作アーカイブをウェブ上に作っています。

その間に、資料収集のためにまわってきたのが、本日の主題の各国歴史資料館です。専門的な問題はいろいろあるのですが、今日は五十嵐さんから、専門的な話よりもむしろ資料がどこにどういうふう眠っていて、どうやって見つければどういうことになるのかという、いわば国際歴史探偵のノウハウを話してくれということですので、それに合わせて、さしあたりはまず、各国史資料館の入館証10枚ほどをパワーポイントに入れておきました。

まずは研究開始時に通った、旧ソ連のマルクス・レーニン主義研究所、現在のロシア国立社会政治史文書館（略称ルガスピ RGASPI）の入館証で、薄っぺらな汚い紙にハンコが押してあるだけです。それに対して、アメリカの国立公文書館や議会図書館、イギリス公文書館、大英図書館等々は、写真入りカードになっていて、これを見せれば簡単に入れるスタイルになっています。今はメキシコもそれに近くなっているのですが、ドイツ国立図書館は、なぜか古いスタイルです。インドの史料館では、日本大使館の紹介状がないと入れないケースもあります。中国の公的資料館、いわゆる档案馆は、紹介状がないとなかなか入れないので、私が主として使うのは上海市図書館です。上海には租界がありましたので、例えば戦時中に中国で出ていた日本語新聞が、上海市図書館にあります。朝日新聞系列の『大陸新報』とか、現地の中国民衆の眼にむしろ近い立場から書かれた日本語

ニュースなども、満州事変・日中戦争の最中に出たりします。そういう意味で貴重です。

1 原点——1972/73年の東ドイツ留学

『マルクス・エンゲルス全集』の「誤植恐るべし」

今日は歴史探偵の手法と産物を、いくつかピックアップしてお話しします。私は大学を出てすぐに、邦訳『マルクス・エンゲルス全集』を出している大月書店という出版社にいました。8年ほどいて、それから名古屋大学、一橋大学に移るのですが、大月書店編集部への入社の際の条件で、外国に留学させてくれることになっていました。それも、マルクス・エンゲルスの新しい文献が今も新『MEGA』という形で出ていますが、それを日本でどういうふうに編集し研究すればいいかという、いわば会社派遣で1972-73年の1年間、調査のための留学でした。その際見たものが資料調査の原点で、その後1990年代になって始める国際歴史探偵の仕事にも影響していますので、そのうち2点だけを申し上げておきます。

ひとつは、マルクス・エンゲルスの研究でドイツに行ってみたものの、がっかりし馬鹿らしくなったことがありました。私の受け入れ先はDietz Verlagという、邦訳『マルクス・エンゲルス全集』の原本を出している東独随一の出版社で、そのマルクス・エンゲルス研究部に形式的に所属し、実際は大学や研究所で勉強していればよかったです。どの国の出版でもそうですが、本には誤植がつきものです。そこにドイツ版『マルクス・エンゲルス全集』（MEW）のドイツ語初版原本があり、すべての巻におびたしい付箋がついていました。それを見ると、ほとんど数ページにひとつぐらい、原本の間違い・誤植がありました。

しかもその間違いは、例えば関係代名詞の前にコンマがつくつかつかないかで全然意味が違ってきたり、もっとひどい場合には、否定形nichtが抜けて肯定形でそのまま邦訳の原本になっている。日本ではそれを真面目に、ドイツ版MEWなら間違いないだろうと忠実に翻訳して、それをめぐっていろいろ解釈し議論していた。その頃大原社会問題研究所に久留間鮫造先生がいて、『マルクス経済学レキシコン』が出ていたのですが、それにはどうも原本の誤植訂正が反映されていないらしい、アムステルダム社会史研究所の手稿原本ならともかく、ソ連と東ドイツのマルクス・レーニン主義研究所の解説文をもとに、あれこれ邦訳の一節を解釈し論争するのは無意味ではないかと思ひ、日本の大月書店に膨大な正誤表を送った記憶があります。

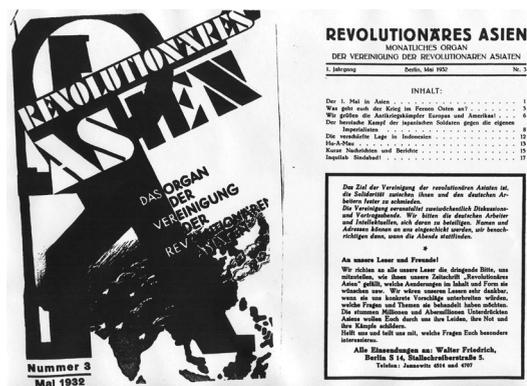
つまり理論としては、社会主義の国だからマルクス主義研究の最高峰だと信じて勉強するのはどうもおかしい。現実に見た社会主義国は、買い物行列はある程度覚悟していましたが、言論・思想の自由や検閲制度など、とうてい西側資本主義国に対抗できないと感じました。

『革命的アジア』誌発見から国崎定洞研究へ

それでむしろ、マルクス・エンゲルスの理論よりも、現実のナチズムと闘ったドイツ労働運動史、日独関係を見てみようと考えて、資料を集めました。旧東ドイツのマルクス・レーニン主義研究所は、普通は大学教授でも許可なしでは入れないのですが、私の場合はDietz社社長が身元引受人で、特権的に自由に入れたので、そこでいろいろ日本関係のものを探していたところ、のちに非常に役

立つ『革命的アジア』という1932年に出たドイツ語雑誌を見つけました。1932年3月創刊ですから、満州事変の半年後で、ドイツにヒトラー政権が生まれる直前です。世界大恐慌の影響をもちを受けて、ドイツで左右の激突が始まり、泡沫政党だと思われていたナチスが32年の2回の総選挙で倍々ゲームで大きくなる。他方で社会民主党政権に幻滅していた失業者や労働者が、ヒトラーと共産党の両極を支持する。そういう状況の中で作られた、アジアについてのドイツ語反戦雑誌がありました。

これに関わったのは、当時ドイツにいた日本人反帝グループで、文部省派遣の大学教授が多いのですが、そのほかに芸術家や文学者もいました。それから中国人で、戦後中日友好協会の会長になる廖承志ら在欧中国人たちです。コミンテルンを通して在欧中国人を指導していたのは周恩来で、パリ留学時代から共産党を組織し反帝運動に結集させている。それに朝鮮人、インド人、ドイツ人協力者を含めた在独革命的アジア人連盟の機関誌です。その東独マルクス・レーニン主義研究所で誰も使った形跡がない資料を見つけ、私は日本に持ち帰りました。



革命的アジア人連盟ドイツ語機関誌
『革命的アジア』第3号（1932年5月）

その頃私はあまり歴史には関心がなかったのですが、貴重なものだとということで、これを医学史の川上武さんと一緒に翻訳し紹介することになりました。国崎定洞という人物を追いかけていくと、大原社研とも関係がありました。彼は医学と社会の接点にある社会衛生学の日本における先駆者・開拓者で、1926年に文部省派遣でドイツに留学して、2年で帰国すれば東京大学に初めてできる社会衛生学講座の初代教授になることが決まっていた。けれども、ドイツでマルクス主義と共産主義運動に近づき、一緒に社会科学研究会を始めた有澤さんたちは日本に帰るのですが、そのまま残って実践運動に入ります。満州事変が1931年9月に始まり、33年1月がナチスの政権掌握ですが、その間に反戦平和・反ファシズムの活動を異国で展開したのです。ちなみに、国崎のことを調べて、『大原社会問題研究所50年史』に出てくる1926年高野岩三郎の第3回渡欧時に、それを迎えた日本人若手学者たちの写真を見つけました。有澤廣巳、国崎定洞、山田勝次郎らで、そのグループが全体としてベルリン在住日本人左派で、大原ともつながっていたことが見えてきました。それが、私の有澤廣巳の留学時代の研究になり、後に『大原社会問題研究所雑誌』（以下『大原雑誌』）第455号に書かせて頂きました。

当時ドイツに留学していた国崎定洞という東大医学部の助教授が、日本に帰らないでドイツ共産党に加わり、ナチの権力掌握後はモスクワに亡命し、最終的にスターリンに粛清されたらしいと噂されていたのですが、戦後も行方不明のままでした。その日本人知識人グループが作ったドイツ語雑誌らしいと解釈して、その頃国崎の消息を追っていた、ドイツで国崎と留学が一緒に法政大学総長も務めた有澤廣巳さん、新劇の千田是也さん、平野義太郎さん、堀江邑一さん、鈴木東民さんらに提供したら、これは大変貴重な発見だということでした。

この問題をさらに追いかけていけば歴史学者になったかもしれませんが、その後は名古屋大学助手から一橋大学の政治学担当としてイギリスやアメリカに留学し、こういう歴史の研究は1970年代半ばに少しやっただけで理論の方に戻り、冷戦崩壊で旧ソ連秘密文書を見るようになって再開したわけです。この系列では、先に挙げた『モスクワで粛清された日本人』『国境を越えるユートピア』のほか、故川上武さんと共著で決定版評伝『人間 国崎定洞』（勁草書房）を出し、『ワイマール期ベルリンの日本人』で仕上げ、最近では『講座 東アジアの知識人』第4巻（有志舎、2014年）に「国崎定洞——亡命知識人の悲劇」を寄稿しています。

2 旧ソ連秘密文書＝ロシア国立社会政治史文書館

国崎定洞・勝野金政・健物貞一の探求

国崎定洞ら旧ソ連で行方不明になった日本人約100人を追いかけて、40人ほどの粛清犠牲者の記録を見つけたのは、先ほど入館証をお見せした、旧ソ連秘密文書を所蔵するモスクワのルガスピ、ロシア国立社会政治史文書館です。旧ソ連共産党附属マルクス・レーニン主義研究所で、コミンテルン、各国共産党、国際共産主義運動の膨大な記録を所蔵しています。

ベルリンの壁が開き、ソ連が崩壊する頃、文藝春秋、週刊新潮、フジテレビ等々、日本のマスコミがモスクワに出かけて、有名なものでは野坂参三失脚のきっかけとなった小林峻一・加藤昭『闇の男 野坂参三の百年』（文藝春秋、1993年）などが出版されました。その本文には国崎定洞は出てこなかったのですが、付属資料が巻末にあって、国崎についてのファイルが5頁入っていました。それで著者たちに問い合わせたところ、野坂関係では役に立たないので入れなかったが、実は日本人についての膨大なファイルがあり、その中にあなたが探している国崎定洞の銃殺判決文、名誉回復決定書など粛清過程が分かる書類・記録があると教わり、ファイルを提供されました。しかも巨額な経費で購入した秘密資料の現物は、文藝春秋社もフジテレビも、単行本に仕上げテレビのドキュメンタリーで放映した後は、どうやらきちんと資料を保存しないらしい。大体は担当編集者やディレクターに任せられ、ダンボール箱に入れられて、退職のときに引き取ればいい方で、不要なら捨てられていく運命なようです。

例えば当時のフジテレビの担当ディレクターは、モスクワ支局で膨大な記録を集めたけれども、ロンドン支局長に転勤になるというので、フジテレビに置いておくと多分どこかでゴミにされるだろうから引き取ってくれと、私の研究室に寄贈してくれて、今は私の教え子の島田顕さんが保管しています。当時のマスコミの集めた旧ソ連秘密資料は、こんな扱いでした。

私は、国崎定洞の粛清過程を徹底的に追いかけるため、とにかく日本に関するファイルはできる



モスクワのルガスピ（ロシア国立社会政治史文書館）前に立つ筆者。壁にはマルクス、エンゲルス、レーニンのレリーフがなお飾ってある。（2014年4月）

だけ広く集めようとモスクワに赴き、ひとまず日本人粛清関係の文書を、国崎定洞ファイルの閲覧から始めました。そして、国崎ファイルを見ていくと、彼が1937年に銃殺刑で粛清された理由は、どうも勝野金政という日本人が1930年から34年まで強制収容所（ラーゲリ）に入っていて、国崎はその事件の関係者として銃殺されたことが分かりました。その勝野金政は、1934年夏に懲役刑を終えて保釈され、日本帰国は禁じられていたのですが、モスクワの日本大使館に逃げ込み、奇跡的に日本に生還したことが、当時の新聞記事と、戦後に書かれた勝野『凍土地帯』（吾妻書房、1977年）から分かりました。本日、勝野金政長女の稲田明子さんが見えていますが、彼はラーゲリ送りになるまで片山潜の私設秘書で、彼と国崎定洞は1928年のベルリン、30年代初めのモスクワで、片山を介して関係していました。そのことがどうも、国崎定洞がその後「日本のスパイ」としてソ連で粛清された直接の理由だと解読できました。

それで、国崎家・勝野家や、まだ存命だった千田是也さんらの協力を得ながら、粛清関係のファイルをどんどん申請・複写して、片山潜以下日本人のファイルを読みました。野坂参三のファイルは、マスコミも長く探して出てこなかったのですが、夫人の野坂龍のファイル、あるいは野坂龍ファイルに出てきたアメリカの日系人労働運動指導者健物貞一のファイルなどを、徹底的に解読しました。1930年代のアメリカは、大恐慌からニューディールの時期で、そこで中国人・フィリピン人移民を含む西海岸アジア人労働運動を指導したため、FBIにつかまって国外追放になり、日本に帰れば治安維持法で捕まってしまうので、当時「労働者の祖国」といわれたソ連に亡命した日本人十数人がいました。在ソ日本人の「アメ亡組」とよばれます。

その指導者で、岡山出身で「第二の片山潜」とよばれた健物貞一という人物が、「佐々木」という党名で野坂龍ファイルに出てきて、粛清されていました。そして、健物と一緒にアメリカからソ連に亡命した「アメ亡組」が、国崎定洞と同じ頃、1936-38年にことごとく「日本のスパイ」として銃殺またはラーゲリ送りになっていました。当時のソ連には100人ほどの日本人がいたと推定できたのですが、そのうち無傷で生き残ったのは、野坂参三一人だけでした。あとの半分ぐらいは殺されました。未だに行方不明が50人以上います。華族出身の土方与志や後藤新平の親戚である佐野碩などは、国外追放で済みましたからラッキーな方でした。

そして、国崎らのファイルに出てくる日本人・ドイツ人・ロシア人の名前を一人一人探求していくと、関係する政治的資料も出てきます。それが、コミンテルン日本関係文書です。

コミンテルン日本関係文書

これは国崎定洞研究の副産物ですが、例えば1922年9月に作られた日本共産党の初めての綱領など政治的資料も多数出てきました。1990年代後半に『大原雑誌』に翻訳して掲載していただきましたが（480/481/482/489/492/498号）、日本共産党やその周辺の人々が、モスクワのコミンテルン本部や片山潜に送った資料がきちんと保管されていて、膨大に出てくるのです。

例えば大原社研との関係では、本日配布資料に入れたのは、日本共産党がマルクス・エンゲルス全集を翻訳したいということで、佐野学と西雅雄を中心的翻訳者にするので許可してくれという、1928年1月のプハーリン及びリャザノフ宛の手紙ですが、こういうものがいっぱい出てくる。大原社研ホームページの中に、リャザノフと高野岩三郎の往復書簡が入っていますが、これはそこに

は収録されていません。東北大の大村泉さんが書いた戦前マル・エン全集のいわゆる改造社版と聯盟版の関係の資料をロシアで見つけてきた記述の中には、一応入っています（『大原雑誌』617号）。当時、大手の改造社が改造社版を、共産党の言い分によれば「社会民主主義者たちが大量に入って翻訳しようとしている」、それに対して大原社会問題研究所が中心となり、学術的に確かなものを翻訳したいから、われわれに翻訳権をくれという内容の手紙です。いわゆる聯盟版で出す予定でしたが、1928-29年の治安維持法による共産党弾圧で、結局実現できなかった事情に関する資料などが、ルガスピには残っていました。

このロシアの国立社会政治史文書館は、先ほど言った入館証を作る煩瑣な手続きなど、非常に使いにくい文書館です。私が通った頃は、パソコンは持ち込み可ですがカメラは絶対駄目、筆記用具も不可でした。文書はすぐには見られません。カタログというかファイルのリストがあって、ほとんどロシア語です。私はロシア語の分かる研究者に手伝ってもらってなんとかできたのですが、そこから申請書に「これとこれを見たい」と書いて請求すると、2日後に読むことができます。ある意味役に立つのは、当該文書が過去に何回、誰が閲覧したかが表紙カバーに記載され、分かることです。これは既に文春取材班が見た、これは自分が初めてだ、と納得できます。

それで、重要だと思うとコピーを頼みますが、コピーを作るのが大変です。著作権・使用権に関する長いロシア語の誓約書に署名すると、「3ヶ月後にできるから取りに來い」といわれます。私が通った頃はコピーが1枚1ドルで、今なら100円ですが、当時は160円ほどでした。「いや来週帰って日本で研究に使いたい」と言うと、ニヤリと笑って「じゃあ」と2本の指を出す。これは1枚2ドルなら1週間後にできるという意味です。イギリスのオックスフォードから来ていたロシア史研究者は、ルガスピではいつもチョコレートを準備し、何か問題が起きたらさっとそれを出すことでなんとか切り抜けてきたと話していましたが、ソ連崩壊後の史料館では、そういう袖の下が必要だったのです。コピーばかりでなく、そもそもどういう資料があるかを相談すること自体大変で、アーキヴィストと個人的に仲良くならなくてははいけません。そのためにいろんな手段を使って近づかなければいけないのが、ロシア式でした。

今でもこうした状態はほとんど変わっていないらしく、現在は週3日しか開いていないと、島田顕さんが『大原雑誌』525号のルガスピ・コミンテルン資料案内に書いています。ソ連崩壊直後は、欧米からいっぱい研究者・ジャーナリストが来ていたのですが、彼らが言うには、こんなに価格が高くなったのは、日本のマスコミが高い金を払って秘密文書を買ったからだ、そのためアメリカなら25セント、つまり4分の1でできるコピーを1ドル払わなければならなくなったと、日本人ゆえに文句を言われたりしました。

NPOメモリアル、サハロフ・センター、KGB文書館

ロシアには、ルガスピ以外にも、歴史資料館はいろいろあります。旧ソ連で粛清された犠牲者についての資料をボランティアで集めている、歴史学者を中心とした「メモリアル」というNPOがあり、協力してくれました。私が訪れたモスクワ郊外のプトボの森は、粛清最盛期に数万人が銃殺された処刑場ですが、その跡地に小さな教会が建てられ、教会の聖職者たちが、地下に埋まった何万人かの犠牲者たちを慰霊しています。一人一人の遺骨までは特定できないのですが、いろいろな記

録にあたって埋葬者リストが作られ、年々増補されています。それからサハロフ・センターは、ノーベル平和賞の賞金を基金にして作られた研究センターで、独自に粛清犠牲者のデータベースを作り、公開しています。

特記しておきたいのは、KGB文書館です。おそらくここに入ったのは、日本人で私たちが最初だったと思います。KGBというのは旧内務省の諜報機関で、今ではプーチン大統領の出身母体として知られていますが、そこにラーゲリ（強制収容所）の収容者記録があります。先ほど紹介した勝野金政の場合は、1930-34年に収容された後に、奇跡的に日本に生還しました。彼の場合、1936-39年の粛清最盛期ではなかったため、1956年スターリン批判後の旧ソ連政府による名誉回復＝推定無罪が適用されたかどうかは、ルガスピの記録ではわかりませんでした。彼についても無実だとわれわれの研究で分かってきましたので、その名誉回復のためにロシア政府に手紙を書き、資料がほしいと申請したら、名誉回復は認められましたが、ラーゲリの資料はKGB文書館にあるといいます。ただしKGB文書館で資料を見るには、日本政府の公正証書で犠牲者遺族であることを証明せよと言ってきました。そこで法務省の公証役場に行き、勝野金政長女の稲田明子さんが勝野金政の直系遺族であるという英文証明書を作って、そのつき添いで私たちが行けば、KGB文書館を開けてくれるといいます。そういうややこしい手続きが必要でしたが、なんとか書類を整えてモスクワのKGB文書館に出かけたら、今度は窓口の受付で「いや、そんなものはない」と拒否されました。いや、われわれは許可をもらっていると公正証書に対する返事を見せて粘って交渉しているうちに、受付の警備員がニヤッと笑って、いまKGB文書館のコピー機が壊れている、このコピー機は日本の富士通製で、どうもインクカートリッジが切れたみたいだ、についてはお前たち入手できるか、といいます。そこで朝日新聞モスクワ支局にも手伝ってもらって、なんとか富士通の該当機種のカートリッジを入手し持っていったら、「スパシーバ」と喜んで入れてくれました。そして閲覧室でラーゲリでの強制労働記録を読み、コピーもとりました。収容所の労働日誌で、何月何日何時から何時まで働いた、黒パン何グラムを与えたという記録を、初めて見ることができました。

勝野金政と寺島儀蔵から学んだ奴隷包摂社会

実は今年の4月に、モスクワのソルジェニツィン・センターに招かれました。勝野金政は、日本に帰ってラーゲリ体験を手記や文学として発表するのですが、当時の特高警察は擬装転向でソ連のスパイではないかと疑いました。左翼の方は、勝野の実体験にもとづく記録を、宮本百合子が「文学以前」と猛然と批判するなど、『赤露脱出記』（日本評論社、1934年）などの貴重な体験記の意義は認められませんでした。これが今日振り返ると、実はロシアでのソルジェニツィン『収容者群島』にあたり、亡くなった人類学者山口昌男さんが「日本のソルジェニツィン」と言い出し、当時日本評論社で勝野の本を担当した故石堂清倫さんも高く評価しました。そのことを記念する講演・展示会をソルジェニツィン記念在外ロシア人センターでやってくれるということで、私や稲田さんがモスクワに出かけ報告することになりました（「モスクワで勝野金政展」共同通信2014年5月4日、「ロシアの声」5月13日、東京新聞5月17日）。

もうひとつ言っておきたいのは、寺島儀蔵さんという、やはり強制収容所に20年以上入って、

ロシアで生きてきた日本人のことで、中公文庫に『長い旅の記録 わがラーゲリの20年』正統が入っていますが、2001年まで存命して、先日冬季オリンピックのあったソチの近くに住んでいました。私はそこを訪れて、寺島さんの粛清体験を聞きとりしたのですが、その答えは、意外なものでした。私は国崎定洞や勝野金政の研究から出発しましたから、政治学者としてどのような政治的告発を受け、「日本のスパイ」「人民の敵」と自白を強制されたかを聞きます。ところが、実際に強制収容所に入れられた寺島儀蔵さんは、もともと札幌の労働運動活動家で、樺太からソ連に密入国し、野坂参三や山本懸蔵のもとで活動して突然逮捕されたのですが、「加藤さん、それは違うよ。私たちは奴隷労働力として使われたただだよ」と言うのです。それでいろいろ事例を調べてみると、確かに明らかに政治的な理由で捕まり、そのまま銃殺された国崎定洞らもいますが、それ以外の強制収容所に入れられた無名の日本人の多くは、ソ連の刑事犯、政治犯と一緒にされて、白海運河の開発とか森林伐採、シベリア鉄道の線路敷設に無償労働力として使われていました。特に1930年代後半のソ連では、全労働人口の1割がそういう囚人労働によってまかなわれていて、突貫工事や鉱山開発の中核的労働力でした。

これが戦後のシベリア抑留に受け継がれたと、私は見えています。そういう奴隷労働が、ソ連の社会主義計画経済の最底辺に構造的に組み込まれていて、戦後はドイツ人240万人、日本人60万人、ハンガリー人50万人など総計420万人の戦争捕虜を用いた、戦後復興・社会主義建設の労働力になります。その証拠に、日本人のシベリア抑留収容所とウラル以西に多いドイツ人捕虜収容所を、ソルジェニツィン『収容所群島』のラーゲリ所在地図と重ね合わせると、地図上でほぼ一致し、スターリン粛清のラーゲリが改築・拡張されて、戦後捕虜収容所になったことがわかります。戦後日本人の憧れたソ連社会主義は、「奴隷包摂社会」だったのです。

スターリン粛清の日本人犠牲者発掘は、何度か新聞記事になりました。無名の人々の多くは、戦前ソ連に入って行方不明になった船員・漁民や鉱山労働者で、家族・友人は異国で死んだろうとあきらめているのですが、その事情、命日や埋葬地が分からない。私の日本人粛清の政治史的研究は、ほぼ2000年までに終えたのですが、そのあとはボランティア活動として、「ネチズン・カレッジ」に「旧ソ連日本人粛清犠牲者・候補者一覧」を掲げ、関連情報を発信しています。100人ぐらいのリストのご家族・関係者から、時々問い合わせがきます。それに答える形でも、何度かロシアに行きました。十数人の犠牲者のご家族・ご親族に、粛清ファイルを届け、命日や埋葬地をお知らせしてきました。2013年4月18日の産経新聞記事「スターリン大粛清、新たに日本人4名の銃殺判明」とあるのが最新の情報です。先ほど述べたロシアのNPO「メモリアル」のサイトに発表された犠牲者リストと、私の「ネチズン・カレッジ」のリストを突き合わせて、新たに5人の全く新しい名前が出てきて、銃殺4人、獄中死1人が加わりました。モスクワ、レニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）以外の地方での粛清や、ノモンハン事件の捕虜の生き残りですパイ容疑により殺された人が、今でもまだ出てきます。

ここでは、ロシアのルガスビ資料ばかりでなく、戦前日本の特高外事警察資料や外務省出入国記録、防衛省戦史資料なども参照しなければならず、学術研究を離れるのですが、人権を奪われた一人一人のさまざまな人生やご遺族に触れることにより、それなりに学ぶことがあります。

国際革命家チャットパディア

旧ソ連の秘密資料には、日本人ばかりではなく、外国人の名前が、日本人粛清の関係者として出てきます。その中の1人で、ヴィレンドラナート・チャットパディア (Virendranath Chattopadhyaya) という、インド独立運動の闘士がいます。インドの独立運動史ではある程度有名ですが、日本ではほとんど知られていません。日本語で書かれているのは、高杉一郎というシベリア抑留帰還者が書いた、アグネス・スメドレーの伝記『大地の娘 アグネス・スメドレーの生涯』(岩波書店、1988年)です。アメリカのジャーナリスト、アグネス・スメドレーというと、中国革命の報道やゾルゲ事件で著名ですが、スメドレーがアジアに目覚めたのはインド独立運動への支援で、1920年代に8年ほど結婚していたのがチャットパディアです。

アグネス・スメドレーは、アメリカで植民地インドの問題に目覚め、それでドイツに渡ってインド独立運動の亡命者グループとつき合います。その中心的指導者がインドの名門貴族出身でオックスフォード大学に学んだチャットパディアで、恋愛結婚しますが、その結婚生活があまりにひどかった。これは彼女の自伝『女一人大地を行く』に出てくるのですが、「私とチャット(チャットパディアの愛称)は、結婚したけれども、ほとんど2人きりになれたことはない」。なぜかという、チャットの家には常に大勢のインド人独立運動家が寝泊りし、インド独立について話し合っていました。おまけにチャットは、2人きりのときはいいことを言うくせに、仲間の前では家父長的で、「カレーを作れ」「酒を出せ」と、自立した女性にとっては屈辱的な態度を強いる。コミュニストなのにこれには失望したというのが離婚の理由で、スメドレーはインド独立運動から離れ、中国に向かい、ゾルゲや尾崎秀実と知り合い、中国の抗日戦、毛沢東の長征を報道する代表的なジャーナリストになるのです。チャットパディアの方は、国際反帝同盟の書記をしながらベルリンに留まり、先ほど述べた国崎定洞・千田是也・勝本清一郎らが作った革命的アジア人連盟に関わります。ヒトラーが政権をとると、国崎定洞と同じようにドイツからソ連に亡命地を移し、レニングラード大学の民族学教授になって、1937年には粛清されます。

私のホームページで一番情報が集まったのは、実はこの人です。日本人についてもご遺族・関係者からいろいろ問い合わせがくるのですが、チャットパディアの場合は、デリー大学の客員教授として滞在した際にインド側資料を集め、英語でウェブ上の尋ね人にしたものですから、世界中のインド人やインド研究の人たちが情報を寄せ、調べてくれて、私がベルリンやモスクワで見つけた記録が役に立つと言って、国際研究ネットワークができました。私の下手な英語論文を親切に書き直してくれる人も現れて、アメリカ、イギリス、もちろんインド等々から情報が集まり、今では数冊の英語の本が出版され、英語版Wikipediaにも立項されています。私自身は、最近『ゾルゲ事件-覆された神話』(平凡社新書)で、スメドレーを論じました。

私がこの問題を扱っているうちに分かってきたことで、まだ仮説で論証できないでいるのは、実は、離婚したスメドレーとチャットパディアが、共通の友人インドのネルーと中国の周恩来を介して、インドの独立運動と中国の抗日戦争を結びつけたのではないかという問題です。中国とインドは1930年代、例えばガンジーと蒋介石、ネルーと周恩来の間で、アジアにおける帝国主義戦争に反対し、共に民族解放運動を進めるという共同声明を何度か出しています。それを仲介したのが、どうもスメドレーとチャットパディアの元夫婦らしく、二人は1934年にソ連で再会しています。

つまり、離婚後30年代も連絡を取り合っていたのです。

しかもネルーは、チャットパディアの親友で、国際反帝同盟の執行委員でした。そこからネルーと周恩来のアジアの反帝統一戦線が生まれ、さらには戦後のインドと中国の民族解放同盟、いわゆるバンドン会議、平和五原則につながる流れが見えてきます。モスクワの第一次史料から、こんな20世紀が見えてくるのも、国際歴史探偵の醍醐味です。

3 アメリカ合衆国・国立公文書館

アメリカ西海岸の日本人・日系人記録

21世紀に入って、ほぼ毎年通っているのは、アメリカ合衆国ワシントンDC郊外のアメリカ国立公文書館（NARA）です。もともとソ連で粛清された日本人の中に、アメリカ西海岸で労働運動を指導して国外追放になり、ソ連に亡命した「アメ亡組」10人ほどがいたためです。モスクワで見たソ連側の起訴状や判決文に出てくるのは、彼らが日本からアメリカに渡った時からソ連潜入をめざす「日本のスパイ」だったという荒唐無稽のもので、しかも事実認定の文章がほぼ同じという、ソ連刑法第58条「人民の敵」適用のためのでっちあげ略式裁判でした。

もともと戦前日本の海外移民には沖縄出身者が圧倒的に多いのですが、アメリカ西海岸の「アメ亡組」にも、沖縄出身者が5人ほど入っていました。沖縄から出稼ぎでアメリカに出かけるところからスパイだったという罪状は、モスクワの雑誌に「外国に居住する日本人はみなスパイであり、また外国に居住するドイツ市民もみなゲシュタポの手先であるといってもけっして誇張ではない」と書かれた1937年粛清最盛期とはいえ、NKVD（KGBの前身）の粛清ノルマ達成用に作文された冤罪でしょう。彼らのアメリカ入国と労働運動に加わった事情、国外追放で日本に戻らず「労働者の祖国」ソ連に入った理由を調べるため、アメリカ国立公文書館やカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）ヤング図書館の日系移民コレクションを訪れることにしました。

FBIの外国人出入国・犯罪関係の文書は、アメリカ国立公文書館で膨大なコレクションになっています。西海岸の日本人労働者のことは、州移民局やUCLAの日系移民コレクションの中にたくさん出てきます。そして今では、2007年にJosephine FowlerのJAPANESE & CHINESE IMMIGRANT ACTIVISTSという学術研究書が出て、彼女が博士論文を書くために集めた資料がUCLAにあります。博士論文出版直後に若くして没した彼女は、モスクワに留学して日本とアジアの関係ファイルを丹念に集め、FBIの日本人・中国人ファイルも集めていますので、大変充実したコレクションです。そのほか「カール米田ペーパーズ」という、米国共産党の日系人指導者の収集資料などがUCLAにあります。つまり、ソ連の粛清を調べる場合でも、アメリカの資料で分かる問題がいっぱいあります。

アメリカ国立公文書館については、仲本和彦さんが書いた『研究者のためのアメリカ国立公文書館徹底ガイド』（凱風社、2008年）という、大変便利なマニュアル本があります。仲本和彦さんは、沖縄県公文書館から派遣されてDCに長期に滞在し、アメリカ国立公文書館の沖縄関係文書を徹底的に収集したアーキビストです。NARAに毎日通い、マッカーサー記念館や歴代大統領の文書館も探索して、今日私たちが使う沖縄返還密約文書や尖閣列島問題処理の関係文書発見の土台を築き

ました。沖縄県公文書館は、これらをウェブ上で公開しており、日本の史料館としては第一級の、米国側第一次資料の収蔵センターです。

仲本さんの『徹底ガイド』に詳しいですが、アメリカ国立公文書館には、研究者ばかりでなくジャーナリスト・大学院生や普通の日本市民でも、何々の研究のためというテーマを登録すれば、簡単に写真入り入館証が作れます。パソコンやスキャナー、デジカメも、昨年からは持込自由になりました。そして、目録室で「自分は何々を研究したいが何を見たらいいか」と相談すると、たいいてい博士号を持っているアーキヴィストの専門家が、どのような資料があるか、申請ボックス・番号、申請書の書き方まで丁寧に教えてくれます。しかも見つけてくれるほとんどが、日本では知られていない機密解除文書です。

野坂参三の在外活動と米国共産党日本人部

私は、アメ亡組のソ連での粛清から出発して、米国共産党日本人部に興味を持ち、野坂参三の1934-38年アメリカ潜入時代の助手ジョー小出（本名鶴飼宣道、憲法学者鶴飼信成の実兄）についての記録を求めていたのですが、これもアメリカ国立公文書館で出てきました。何を調べたかといいますと、野坂参三の天皇制論は、支配制度としての天皇制と日本民衆の天皇崇拝の半宗教的性格を区別しなければならないというもので、天皇制打倒のスローガンに反対し、戦後日本国憲法の象徴天皇制にも影響を与えたという説がありますが、どうも野坂の著作・論文を調べると、ほとんどがコミンテルンやソ連の見解の焼き直しで、理論的オリジナリティはない。きっと種本があるに違いないと探したら、1930年代米国共産党日本人部きっての理論家で知識人であったジョー小出に行き着いたのです。戦時米国の戦略情報局（OSS、戦後のCIAの前身）資料の中に、小出の天皇制論があり、戦後の野坂はその示唆をもとに「愛される共産党」のシンボルになったと推定できました。その延長上で、戦時米国政府機関の天皇制利用論を追ったのが、私の平凡社新書『象徴天皇制の起源』です。米国共産党日本人部については、ジョー小出と共に初期の指導者で、上海に派遣され尾崎秀実とゾルゲを結びつけた鬼頭銀一というゾルゲ事件の隠れたキーパースンの存在と共に、最新の平凡社新書『ゾルゲ事件』に書きましたので、ご参照ください。

アメリカ国立公文書館NARAでは、コピーも簡単にできます。閲覧室内のコピー機が並んでいるコーナーで、自分でコピーカードかコインでとればいいのですが、1枚25セント、つまりロシア・ルガスピの4分の1です。おまけに1990年代に私がモスクワで収集した旧ソ連秘密文書の多くが米国に買い取られ、米国議会図書館（Library of Congress, LC）やイエール大学、スタンフォード大学フーパー研究所などで見ることができます。ですから今日では、旧ソ連秘密資料の多くも、ルガスピで煩瑣な手続きで1枚1ドルでコピーしなくても、米国で同じものが25セントで即日手に入ります。私が21世紀にモスクワへ行かなくなった理由の一つです。

国立公文書館だけではなく、米国議会図書館LCも、蔵書・資料が充実しており、入館登録・閲覧手続きも簡単です。例えばルガスピの米国共産党関係文書一式や、占領期に米軍が押収した日本の旧内務省文書は、米国議会図書館にあります。また、占領期日本の書籍・新聞・雑誌を網羅する全出版物の現物が、当時は占領軍の検閲、プレス・コードがあったために、国立公文書館のすぐそばのメリーランド大学図書館プランゲ文庫に収められていて、占領期のメディアや検閲の研究者に

はよく知られ、利用されています。

日本でもようやくアジア歴史資料センター（アジア歴）ができて、海外からも日本の公文書を簡単にダウンロードできるようになりましたが、まだまだ遅れています。戦後日本の多くの新事実・新資料は、時々ニュースになるように、アメリカが収集し機密解除した史資料から発見される場合が多いのが現状です。日本近現代の研究者にとって、米国の公文書館は、質量共に圧倒される研究素材の宝庫でしょう。

大学史料館・民間史料館

国崎定洞や米国共産党日本人部関係の資料収集では、各国の大学史料館も利用しました。モスクワ大学は調べたことはないのですが、ドイツではベルリン大学、アメリカでもいくつかの大学史料館に入りました。UCLAの日系移民コレクションのような各大学図書館所蔵の特別コレクションではなく、大学そのものの史料館です。大原社研も法政大学の一機関で特別アーカイヴですが、世界の大学史料館には、大学・学生の記録を保存し公開する事例があります。

ドイツのベルリン・フンボルト大学では、ナチ時代の聴講生を含め、在学した全学生の学籍簿、講義要綱、学生会の記録等が保存されています。国崎定洞と在独日本人の研究では、これが大変役立ちました。日本からの留学生・文部省派遣者の所属学部や入学・卒業年、受講講義や同期の在籍者を調べ、誰と誰がドイツ語学校で同じクラス、同じ講義を受けていたといった人脈図を作ることができました。ハイデルベルグ大学では、哲学者の三木清と歴史学の羽仁五郎の留学時の受講記録と成績表を見せてもらいました。アメリカのコロラド州デンバー大学では、後に米国共産党日本人部の初代・第2代書記になる鬼頭銀一とジョー小出が、入学は半年ずれていますが、いくつかの講義を同時に受け、特にベン・チャーリントン教授の社会学講義と社会調査実習が、共にキリスト教人道主義から出発した二人の日本人を社会主義思想に導くきっかけになったと推定できました。東京大学や京都大学に大学史料館ができましたが、日本の大学も、ぜひ講義要綱や学籍簿まで資料公開するようになってほしいものです。

その他日本でもそうですが、民間の貴重な史料館が世界にはたくさんあります。戦時ユダヤ人迫害についてはワシントンDCのホロコースト博物館が著名ですが、ヨーロッパの小さな町でも、ユダヤ人街があると、ナチスに襲われた展示館や記念館があります。インドのヴィレンドラナート・チャットパディアの調査では、ハイデラバードにあるチャットの実姉で国民詩人・国民会議派政治家であったサルジニ・ナイドウの記念館に、ハイデラバード大学学長であったチャットパディア家の家系の記録があり、コミンテルンで活動していたチャットが、姉を通じてガンジー、ネルーとも強いつながりを持っていることが分かりました。日本との関係では、米国ロサンゼルスの日系アメリカ人博物館のほか、ドイツ・ベルリンの森鷗外ハウス、ハイデルベルグの南京大虐殺証言者ジョン・ラーベ記念館などで、貴重資料が入手できました。

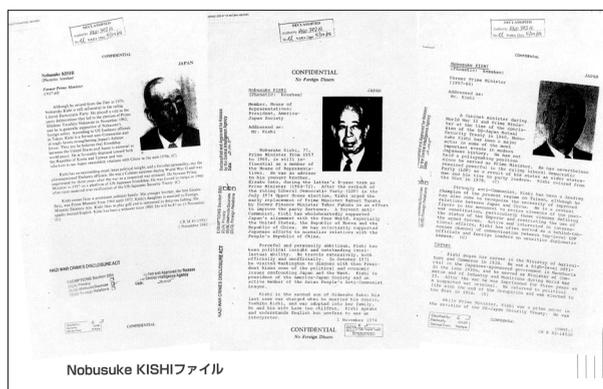
ナチス・日本帝国戦犯IWG文書

アメリカ国立公文書館（NARA）の資料のなかで、マスコミや研究者が特に注目しているのは、ビル・クリントン政権末期の1998年ナチ戦犯資料公開法、2000年日本帝国政府情報公開法で新た

に機密解除された、戦前・戦中・戦後期のドイツ及び日本での戦争犯罪関係資料の新公開です。2007年にNARAの記者会見で、日本関係資料10万ページの新規公開が発表されました。読売新聞社主の正力松太郎がCIAのエージェントとしてPODAMという暗号名を与えられ、日本のテレビ放送や原子力発電の発役に暗躍したり、CIAが朝日新聞出身の緒方竹虎を吉田茂の後継首相にしようとしたPOCAPON工作があったことなどは、これら機密解除資料で明らかになりました。

早稲田の同僚で研究仲間の有馬哲夫さんが、『日本テレビとCIA 発掘された「正力ファイル」』（新潮社、2006年）を皮切りに、『原発、正力、CIA』（新潮新書、2008年）、『昭和史を動かしたアメリカ情報機関』（平凡社新書、2009年）、『アレン・ダレス 原爆・天皇制・終戦をめぐる暗闘』（講談社、2009年）、『CIAと戦後日本保守合同・北方領土・再軍備』（平凡社新書、2010年）、『大本営参謀は戦後何と戦ったのか』（新潮新書、2010年）、『原爆と原発「日・米・英」核武装の暗闘』（文春新書、2012年）、『児玉誉士夫 巨魁の昭和史』（文春新書、2013年）、『こうしてテレビは始まった:占領・冷戦・再軍備のはざままで』（ミネルヴァ書房、2013年）など精力的に研究を発表していますから、ぜひご覧下さい。私たちの研究グループも、分量の一番多い緒方竹虎のCIAファイル全5冊を解読して、毎日新聞2009年7月26日朝刊で「CIA緒方竹虎を通じ政治工作、50年代の米公文書分析」という一面トップ記事に取り上げられ、英字紙でも紹介されました。共同研究者の吉田則昭さんが『緒方竹虎とCIA』（平凡社新書、2012年）にまとめ、山本武利さんの『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』（岩波現代全書、2013年）でも使われています。

これは、IWG（ナチス戦争犯罪記録及び日本帝国政府記録省庁間作業部会）文書といって、現在、アメリカ国立公文書館のホームページで、どこまで公開されているかが、ファイル名まで日本から見ることができます。その中には、中央情報局CIA、陸軍情報部MIS（Military Intelligence Service, G2）、連邦捜査局FBI等々、米国政府機関が収集・保管してきた機密文書が膨大に含まれています。ただし現物はNARAに行かないと閲覧・コピーできないので、私はこの十年ほど、占領期の政治と日米関係の深層を調べるために、ワシントンDCに年2回ほど行くようにしています。その全容については、「戦後米国の情報戦と60年安保—ウィロビーから岸信介まで」（『年報日本現代史』第15号、現代史料出版、2010年）という論文で紹介し、「ネチズン・カレッジ」にも公開しています。



アメリカ国立公文書館所蔵、機密解除された「CIA岸信介ファイル」（戦犯資料と銘打っているが、巣鴨拘置所時代や自民党への秘密献金を示す文書は入っておらず、全面公開には至っていない）

概要は、朝日新聞社の『週刊日本の歴史』第44号（2014年5月18日号）にも書きました。注目度の高いCIAの個人ファイルについては、正力松太郎、緒方竹虎のほか、戦時日本軍情報将校の有末精一、河辺虎四郎、服部卓四郎らの再軍備工作や吉田首相暗殺計画まで入った『CIA日本人ファイル』という31人分を収録した資料集を編纂中で、今年中には日本でも読めるかたちになります（現代史料出版から、全12巻で刊行予定）。

その「解説」にも書きましたが、第二

次世界大戦当時の関係者がほぼ亡くなり、個人情報・プライバシー保護の問題がなくなって、岸信介や昭和天皇裕仁のCIAファイルは未だに国家機密扱いが多く、期待はずれでしたが、CIA以外にも多数の資料が、21世紀に入って機密解除になっています。例えばCIAの前身OSSについては、戦時中に米国側で日本軍国主義との宣伝戦に加わった日本人・日系人の勤務記録（ビジネス・ファイル）も、2008年に公開されました。ジョー小出や石垣綾子が米国の対日プロパガンダにどのように協力し、いくら年俵が払われたかがわかります。春名幹男さんの先駆的研究『秘密のファイル』（新潮文庫）にも書かれていますから、ご参照ください。

米国陸軍情報部の日本人監視資料RRファイル

日本現代史や社会運動史の研究者にお勧めなのは、むしろ陸軍情報部（MIS）の機密解除ファイルです。NARAでの分類・申請上は、IRRファイルといえます。戦後の米軍は世界中に基地を持ち、そこには必ず情報部G2=MIS指揮下にCIC（Counter Intelligence Corps対敵防諜部隊）が配置されています。CICは、占領期にまず大量に日本にやってきて各都道府県に置かれ、重要人物・反米勢力を日常的に監視していました。サンフランシスコ講和条約による独立後も、米軍基地内にCICがおかれ、日本の政治勢力、特に共産党や社会党を監視しました。沖縄は直接占領が続きませんでしたので、要注意人物のファイルは膨大なものになります。沖縄人民党指導者瀬長亀次郎や非合法沖縄共産党指導者国場幸太郎の監視記録は、現在沖縄県公文書館でも見ることができます。日本人の個人ファイルが、少なく見積もっても約2,000人分あり、吉田茂、岸信介、中曽根康弘、大平正芳ら首相経験者、共産党の野坂参三、徳田球一、志賀義雄、社会党の浅沼稻次郎らについての米軍の評価が分かり、児玉誉士夫、笹川良一、里見甫など右翼や旧軍人の戦後も監視されています。それから学者でも、例えば湯川秀樹や都留重人のファイルがあり、法政大学総長で社会党ブレンだった大内兵衛のファイルも入っています。

私は約2,000名の陸軍情報部日本人個人ファイルのうち、著名人200人分ほどを解読し、例えば中曽根ファイルから彼が日本の原発導入の中で果たした役割の米国側評価を分析して、井川充雄さんと共編の『原子力と冷戦——日本とアジアの原発導入』（花伝社、2013年）で紹介しました。ゾルゲ事件被告川合貞吉ファイルの解読から、ゾルゲ事件の発覚の端緒を作り戦後も米軍スパイだったと尾崎秀樹や松本清張により告発されていた伊藤律は実はスパイではなく、川合貞吉こそG2ウィロビー將軍とキャノン機関から月2万円で雇われた正真正銘の米国スパイだったことを証明して、昨年新聞やテレビで大きく取りあげられ、松本清張『日本の黒い霧』に文藝春秋社の断り書きを入れさせ、平凡社新書『ゾルゲ事件』に詳しく紹介しました。

ところがまだ1,800人ほど無名の人たちのファイルが残っており、それらをざっと見てみると、その多くが、戦争捕虜としてシベリアに抑留され、戦後のソ連で収容所を体験した人々に対する、引き揚げ帰還時の舞鶴港などでの米軍尋問記録であることが見えてきました。抑留帰還者のファイル収集と詳しい分析はこれからですが、そこから戦後冷戦期の情報戦、ラストボロフ事件のような旧ソ連の対日諜報とそれに対する米国の対応が見えてくるはずですよ。

人文・社会科学版マンハッタン計画

こういう歴史探偵をやっていくうちに、戦後米国の世界支配の秘密も、大筋が見えてきました。戦時中、アメリカは敵国ドイツや日本を研究するために、戦略情報局OSSの調査分析部（Research & Analysis, R&A）に膨大な科学者を動員し、戦争勝利のための情報を分析し、各国別に学際的百科全書と研究用マニュアルを作ります。それも各種のものを、国立公文書館で見ることができます。私はこれが、現在の日本の社会科学・人文科学にとっても、重要だと思います。

「人文・社会科学版マンハッタン計画」と仮に名付けましたが、米国の戦時科学者動員のシステムが戦後西側世界に広がり、ソ連崩壊後は全世界に広がって、グローバル・スタンダードとして大学や科学研究のあり方を支配している、という仮説です。いうまでもなく、マンハッタン計画は、アメリカの政府・軍・自然科学者・技術者を総動員した原爆製造計画ですが、その社会科学・人文科学版があったのではないかと思います。つまり、あらゆる学問分野のすぐれた人たちを集め、いろいろな国のことを徹底的に分析し、勝利の方法だけではなく戦後米国による占領や支配のあり方も研究されていました。それが戦後、一方では国務省・軍やCIAの政策・世界戦略立案の手法に、他方で大学や学界のあり方の原型となり、広がったと考えます。

しかも、歴史家シュレジンジャー、経済学のレオンチェフ、ロストウのような戦後活躍する著名な学者ばかりでなく、スウィージー、バランのようなマルキストや、フランツ・ノイマン、ヘルベルト・マルクーゼのようなユダヤ系亡命ドイツ人でフランクフルト学派と呼ばれる人たちも入っていた。そこで戦後のドイツをどうするか、日本をどうするかという研究を、早くから進めていた。あらゆる学問分野、政治学、経済学、法学、歴史学、社会学ばかりでなく、宗教学、人類学、心理学、言語学、地理学、民俗学、文化論、メディア論等々も動員されて、のちに近代化論modernization theoryと地域研究area studiesとよばれるアメリカ型研究システムが作られた秘密が、NARAのOSS資料の山に取り組んで、おぼろげに見えてきました。

OSS調査分析部の総力戦体制と戦後米国の科学支配

例えばOSSの調査分析部は、アジア・太平洋戦争期に、辞事典や年鑑、日本兵が戦場に残した日記・手帳、戦争文学、ラジオ放送、宗教、方言や部落問題・アイヌの扱いまで集めています。写真や映画、婦人雑誌・子ども雑誌も集められます。一番重要なのは統計と地図で、当時入手できる限りの日本のあらゆる地域の地図が集められ、どこの港の水深はどのぐらい、どちら側から入れれば何トンの船を横付けできるかというような実践的研究がされます。陸軍と海軍の対立、天皇と華族のあり方、家族制度や女性の地位と役割、国家神道、大衆文学、「地震・雷・火事・親父」や俳句・川柳まで分析対象です。日独伊枢軸国の歴史と現状は徹底的に分析され、連合国の勝利の土台が作られました。有名なルース・ベネディクト『菊と刀』は、その副産物です。

OSS/R&Aには、当時のアメリカの最高の頭脳2,000人が集められ、この人たちが、戦後のアメリカと世界の学問をリードするのです。しかも、ドイツや日本の学者の戦争動員とは違って、OSSの科学者たちは反ファシズム、自由と民主主義を守るという大義名分と情熱・献身があります。人類の文明と正義のためですから、後ろめたさはありません。もっとも戦後に後継機関CIAの謀略・陰謀が明らかになると、マルクーゼら関係者は、戦時の仕事について沈黙しますが。

そして、予算と人員の集中的配分、研究者の学際的プロジェクト編成、対日戦・占領管理のための集中的日本語・日本事情教育が行われました。報告書の作り方が、アメリカ的です。ある問題の専門家が「日本の造船産業」のような特定課題の報告を作ると、作成者名は伏せられ、同じ領域の専門家がコメントして学術的に評価されます。それを第三者が、他領域の報告や軍事的政治的意義を加味して、信頼性と重要度の評点をつけます。レフェリー制です。そうした個別報告を総合して日本の政治経済・社会文化についての学際的百科全書が作られ、アジア課・日本担当全体に情報が共有されます。他方で軍事的政治的に重要な情報は、セクションの名で短いレポートにまとめられ、陸海軍・国務省・農商務省など他省庁、前線にも送られます。最高機密や緊急性のあるものは、1枚の紙にまとめられ、OSSドノヴァン将軍の名でホワイトハウスまで届き、大統領の政策決定に用いられます。説得力ある統計、数量的シミュレーション、歴史なら具体的事例と実証性が評価基準になり、それが図表・写真やチャートでわかりやすく説かれると信頼性が増し、やがて報告書作りの定型書式、時限を区切った進行表もマニュアル化されます。重要度と実績に応じて、プロジェクト毎に予算と人員が再配分されます。アメリカの戦時科学動員、軍産官学協同は、このようなものでした。今日本の大学・研究機関で進んでいる業績主義、競争型予算配分、産学協同、プロジェクト型重点研究の原型です。

それから連合国の情報戦・心理戦なのに、自然科学者のマンハッタン計画に似て、ソ連との対抗が強く意識され、英国、カナダは組み込まれますが、ソ連に対しては秘密で進められます。ロストウ風近代化論と学際的地域研究が重視されます。マルクス主義の原始共同体から共産主義に至る唯物史観に対抗して、農耕社会から工業社会に飛躍し高度消費社会に至る近代化の筋道と指標が作られ、各国社会がそのどの段階にあるかが測られます。マルクス『資本論』の再生産表式・ソ連型計画経済に対抗して、レオンチェフの産業連関表やクズネツの国民所得計算で戦力・経済力が具体的に計測・予測され、戦後のGNP計算、国連やOECD統計のもとになります。さらに基礎理論の大枠は、OSSにエドワード・シルズとタルコット・パーソンズが動員され、社会システム論・社会統合論、文化や心理学を組み込んだAGILモデルになります。

これが事実上、硬直したマルクス・レーニン主義の土台・上部構造論、経済決定論への批判になり、しかも開かれた理論システムで、フィードバック可能な社会理論になります。マルクス・レーニン主義は理論枠組も発展段階論も体系的な一元論ですが、パーソンズの社会システム論、レオンチェフらの産業連関表・国民所得、文化人類学・社会心理学に、ロストウ風近代化論・経済成長論を重ね合わせると、山之内靖さんがパーソンズに総力戦論を読み込んだように、多元的で開かれた反マルクス主義の社会科学・人文科学として、冷戦期に世界に浸透しました。戦後のGNP競争、産軍学協同、国際金融や政府開発援助の仕組み、現在の世界大学ランキングや大学・研究機関の研究費獲得競争の原型は、この戦時米国の科学技術動員に始まるというのが、私の現段階の仮説です。

4 在独日本大使館員・崎村茂樹の戦時亡命

「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」崎村茂樹

やや史料館めぐりから離れましたが、私がいま個人として探求しているのは、元東大農学部講師

(農業経済学)で戦時在独日本大使館囑託でありながら、1943-44年にスウェーデンに亡命した、崎村茂樹という人物の生涯です。この人のことは、戦時中『ニューヨーク・タイムズ』1944年5月1日号に「日本人が大使館から脱走」、『タイム』誌6月5日号「抵抗の方法」という大きな記事があり、「初めて連合軍に加わろうとした日本人」「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」と報道されています。連合国側のプロパガンダ報道です。それなのに、戦後も日本側の報道や研究が全く見当たらない。そこで、在独日本人研究を続けてきたドイツの連邦アーカイヴ、国立図書館ばかりでなく、イギリスやスウェーデンの公文書館でも、資料を探索することになりました。

正確にいきますと、昔ベルリンの壁があったポツダム広場に、いまソニービルが立っていて、その中にドイツ映画博物館があります。そこに、カレーナ・ニーホッフという戦後西ドイツで活躍したユダヤ系の女流映画評論家の記録があり、その評伝を書いている映画ジャーナリストが、彼女の記録の中に「サキムラ・シゲキ」という日本人の名前が出てきた、この日本人が戦時中、ユダヤ人であるニーホッフの命をナチスの迫害から救ったらしい、については、この人物は何者なのか調べてくれという依頼メールが、ドイツから日本の日独関係研究者に送られてきました。その依頼を受けた私と成城大学田嶋信雄教授以下何人かで研究ネットワークを作り、調べたのがきっかけです。

元東大講師とはいえ、有名人ではありませんので、最初はまず戦前の紳士録、職員録、人事興信録等々を調べ、公的経歴の概略は分かりました。在独日本大使館員というから外務省外交史料館で簡単に見つかるかと思ったら、1945年5月ドイツ敗戦時の在欧日本人のソ連・満州国経由での帰国者名簿に名前が出てくるくらいで、肝心のスウェーデン亡命、連合国との接触事情が分かりません。それでドイツ連邦文書館とスウェーデン文書館にあたったら、当時の枢軸国ドイツ外務省と中立国スウェーデン警察の記録から、ベルリン日本大使館員崎村茂樹のストックホルム一時亡命、連合国側メディアでの枢軸国敗北宣伝、それを知った在欧日本外事警察とドイツ・ゲシュタポの連携によるドイツへの強制送還が間違いないとわかりました。

同時に、日本のご遺族にも連絡がついて、崎村茂樹が戦時中スウェーデンに亡命したばかりではなく、戦後もなぜか日本に戻らず、旧満州に留まって、長春(満州国時代の新京)、北京の米国領事館に通訳兼アナリストとして勤務し、1955年まで中国にいたことが分かりました。しかも毛沢東の新中国では、1950年に「毛沢東暗殺未遂事件」に連座して公安警察に捕まり、5年間の拘禁生活を送り、留守家族がそうしたことを知ったのは、55年に中国から帰国してからであったといえます。帰国後は拓殖大学教授、東京理科大学教授として経済学者に戻り、1982年に没しますが、ドイツ・スウェーデン・中国での15年間の在外活動については、ご家族にもほとんど話していませんでした。

ドイツ、スウェーデン、イギリスの公文書館

そこでご子息と一緒にベルリン、ストックホルムに赴き、カレーナ・ニーホッフご遺族や崎村の下宿先の聞き取りをし、戦時在独日本大使館の関係文書は連合軍に押収されて米国・英国の公文書館にあることを突き止めて、ようやくある程度事実関係が分かってきました。まだ中国档案館の公安資料のガードが堅く、全容を書物にする段階にはありませんが、『インテリジェンス』誌第9号(2007年)と『未来』誌第541号(2011年10月)に、中間報告は発表してあります。後者では、

崎村茂樹がストックホルム亡命時に、後に西ドイツ首相・ノーベル平和賞受賞者になる社会民主党のヴィリ・ブランド、オーストリア首相ブルーノ・クライスキー、それにスウェーデンのノーベル経済学賞・平和賞受賞者ミュルダール夫妻が反ナチ社会民主党系亡命者を組織していた「クライネ・インテルナツィオナーレ」（社会民主主義小インターナショナル）に出入りしていた事実を、ブランド自伝を手がかりに発掘し、ボンのドイツ社会民主党フリードリヒ・エーベルト財団ヴィリ・ブランド・アーカイヴの資料で明らかにし、田中浩編『リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー』（未来社、2013年）に収録・公刊しています。

そのさい、スウェーデン公文書館やドイツ連邦文書館・国立図書館、ボンのドイツ社会民主党文書館などに入って、崎村茂樹関係資料を探索しましたが、事前にメールで研究テーマと探索案件を知らせておけば、実に簡単に入館でき、訪問時には関係資料をアーカイヴから取り出し、閲覧室に準備してくれます。閲覧して必要ファイル・ページのコピーを頼めば、半日で即新資料発掘です。特にドイツ社会民主党文書館の政党としての開かれた歴史資料保存・公開には感心しました。国家・政府機関の史料館ばかりでなく、日本や他国の政党も、ぜひ見習ってほしいと思います。

スウェーデン国立公文書館の探索では、1944年崎村茂樹のベルリンへの強制拉致・送還に関係した可能性があるので、当時のストックホルム駐在陸軍武官小野寺信の記録もあれば見たいと、ついでにメールに書いたのですが、これもスウェーデン警察の監視記録があって、全文を入手できませんでした。後に小野寺信のヤルタ密約緊急電が参謀本部に届いていたかどうかクローズアップされた際、小野寺家ご遺族、研究者やジャーナリストに提供することができました（小野寺百合子『バルト海のほとりにて』共同通信社、1985年、エヴァ・パワシュールトコフスカ、アンジェイ・タデウシュ・ロメル共著『日本・ポーランド関係史』彩流社、2009年、岡部伸『消えたヤルタ密約緊急電』新潮社、2012年、吉見直人『終戦史』NHK出版、2013年、参照）。

その過程で、アメリカばかりでなくイギリスの公文書館にも通い、英国国立公文書館（BA）と英国国立図書館（BL）の充実ぶりには感動しました。どちらも入館証を作るには英語での写真入り身分証明書2種類が必要で、私はパスポートの他に国際運転免許証を持って行きましたが、いったん登録・入館すると、あとはBAホームページで見られる資料目録が完璧で、キーワード検索で簡単に申請し、すぐに見ることができます。ロンドン郊外の英国公文書館では、閲覧室にデジカメ撮影の専用コーナーまで設けられていて、スムーズに資料探索が進みます。崎村茂樹探索のついでに、戦時ドイツ外務省トリッペントロップ事務所の記録が英国軍によって押収され所蔵されていたと知り、日独関係やゾルゲ事件の研究に大いに役立ちました。いったん入館証IDを獲得すると、小さな資料なら目録から資料番号を指定すると無料でpdfのデジタル資料が即日届きます。マイクロフィルムや大きな資料なら、複写料金・送料がかかりますが、航空便か船便か、保険をかけるか無保険かの選択制で、クレジットカード決済ができます。アーキビストも親切で、公文書館としては、米国以上に使い勝手がいいです。

英国国立の大英図書館は、マルクスが『資本論』を書いた大英博物館の図書部が独立したもので、古今東西、あらゆる言語の文献資料の宝庫です。試しに館内データベースで「ゾルゲ」と入力したら、50冊近い各国語ゾルゲ事件文献が出てきてびっくりしました。多くが日本の研究では言及されたことのないもので、中には米国・英国の諜報機関（MIS/MI6）の教材テキストまで入っていて、

先日出した平凡社新書『ゾルゲ事件』執筆に役立ちました。

5 日本にも眠る歴史資料，中国研究の困難

アジア歴，国会図書館憲政資料室，研究ネットワーク

国際歴史探偵を名乗り，世界の公文書館をまわって成果を著作・論文やホームページ「ネチズン・カレッジ」から発信していると，同時に，読者・視聴者の方からの問い合わせや資料提供があります。戦前旧ソ連粛清犠牲者の消息探し，在独日本人の研究などでは，ご遺族・関係者から突然メールが舞い込み，新たなテーマと探求が進むことがあります。

平凡社で『島崎翁助自伝——父・藤村への抵抗と回帰』という本を，2002年に島崎爽助さんと共編著で出していますが，これは私が「ネチズン・カレッジ」に国崎定洞・千田是也らベルリン反帝グループの一員として島崎藤村の三男翁助の在独活動を書いていたのを，翁助の長男，したがって島崎藤村の孫にあたる爽助さんが，ウェブ・サーフィンで見つけメールで連絡してきて，画家翁助の未発表自伝や島崎家に残された膨大な書簡・資料が見つかり，群馬県大川美術館での島崎翁助個展開催を機に，書物としてまとめたものです。昨2013年秋，これが日本近代文学史の貴重資料でもあるということで，爽助さんと共に日本ペンクラブの公開研究会に招かれ，講演してきました（日本ペンクラブ『P.E.N.』第423号，2014年）。

もちろん，日本のアジア歴史資料センター（アジア歴）や国会図書館憲政資料室も，最近は充実しています。例えば，かつてUCLAまで出かけてコピーしてきた日系移民記録「カール米田ペーパーズ」などは，憲政資料室でもみられるようになりました。モスクワのコミンテルン日本関係文書も，その後一式資料集として発売され，現在では北大・早稲田大・一橋大・同志社大等で見ることができます。先述したように，沖縄県公文書館は特にお勧めで，沖縄に関する日米関係なら，わざわざアメリカまで行かずとも，貴重資料にアクセスできます。コミンテルン史や日米関係では，グローバルな研究者のメーリングリスト（ML）ネットワークがあり，未公開資料の所在から，当該領域の研究者の人事募集情報まで，著名な大家から無名の若手・大学院生まで，日常的に研究情報・意見を交流しています。

自分のみつけた資料を公開すると，関連資料はどんどん集まってきます。占領期の社会党・共産党の活動家やシベリア抑留体験者が老境に入ると，最近は当事者やご遺族・関係者から，例えば一橋大学図書館や法政大学大原社研で引き取ってくれるよう仲介してほしいという相談が持ち込まれます。実際はどこの図書館・研究所も予算・人員とスペースの問題があり，蔵書や資料の引き取りは，寄贈でも容易ではありません。多くは古本屋にまわるか，捨てられていきます。私自身の蔵書の多くは，メキシコ大学院大学で幾度か客員教授として講義した経験から，スペイン・ポルトガル語圏の日本研究のためにと，一橋大学退職時にメキシコに寄贈しました。団塊世代の研究者仲間では，中国の大学図書館に寄贈する話が時々聞かれます。

沖縄非合法共産党資料，野坂参三の茶封筒

そういう活動の中で，私が見つけた貴重資料があります。『大原雑誌』509/510号に発表した，

戦後沖縄の非合法共産党資料は、福島の前『赤旗』ベルリン特派員で社会運動家の金澤幸雄さん宅の土蔵の中から見つけたもので、当事者の国場幸太郎さんの協力も得て『戦後初期沖縄解放運動資料集』全3巻（不二出版、2004-05年）の目玉になりました。大変反響が大きく、最近DVD版に再版・復刻されて、森宣雄・鳥山淳編著『島ぐるみ闘争』はどう準備されたか』という、若手研究者主導の論集（不二出版、2013年）へと結実しました。

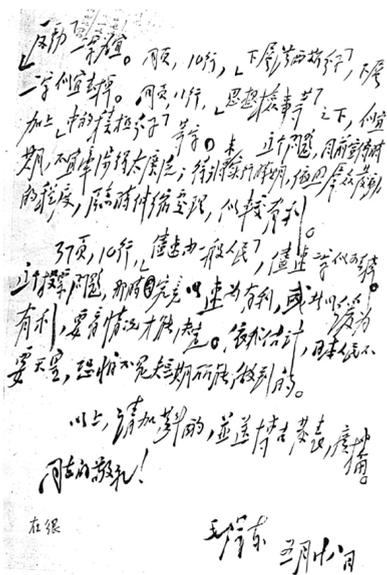
信州社会運動資料センターを主宰する由井格さんは、戦後の学生運動・労働運動活動家であると共に、長野県川上村の名家の出身ですが、お孫さんのピアノ部屋を設けるために所蔵資料を整理したいというので、私は中国人・在日朝鮮人の大学院生を伴って、下見にでかけました。後に「水野津太資料」と名付けられ、今日慶應大学特別図書室と同志社大学人文科学研究所資料室に収められているものですが、そこで戦後初期に日本共産党党史資料室員であった水野津太の遺品を整理しているうちに、奇妙な茶封筒が出てきて、中国語の手紙が入っていました。同行した中国人留学生許寿童君（現中国三亜学院大学教授）に読んで貰うと、なんと中国共産党の毛沢東が延安で、日本敗戦時に野坂参三に宛てて書いた直筆の手紙の原文でした。

茶封筒そのものが、どうやら野坂参三が中国から持ち帰った彼にとっての重要資料綴りらしく、野坂の中国国民党蒋介石との往復書簡や、占領期の米軍から入手したらしい皇室財産一覧表や米軍関係者宛日本共産党文書も入っていました。その全容は記者会見で発表して各紙で報道され、私が『文藝春秋』2004年6月号に『野坂参三・毛沢東・蒋介石』往復書簡』を書き、後に『情報戦と現代史』（花伝社、2007年）に収録しました。所有者の由井格さんも『革命に生きる 数奇なる女性・水野津太』（五月書房、2005年）という書物にし、毛沢東直筆手紙は中国共産党中央委員会党史研究室に、蒋介石の方は台湾の蒋介石記念館にコピーを寄贈し、茶封筒の現物など第一次史料は研究仲間の松村高夫さんを通して慶應大学図書館に、その他雑誌・文献資料は故田中真人さんを通して同志社大学人文研に収めました。

これには後日談があります。昨年由井格さんの所に、ある成金中国人富豪から『文藝春秋』で見ただけで連絡があり、慶應大学に買い取って貰った毛沢東直筆書簡の価格の数十倍の金額を示して、買いたいといってきたそうです。

歴史資料にも競争と市場化の波

実は、こうした歴史の史資料マーケットは、グローバル化に伴い、広がっています。戦前日本ペンクラブの創始者で初代会長だった島崎藤村がらみで、ロンドンで国際ペンクラブとノーベル文学賞の関係を調べに行ったら、国際ペン本部の歴史資料は、本部の財政問題もあり、戦前・戦後の基



信州に眠っていた毛沢東の直筆書簡（岡野進＝野坂参三宛、1945年5月28日、「私は、日本人民が天皇を不要にすることは、おそらく短期のうちにできるものではないと推測しています」とある）

本資料は米国テキサス大学オースチン校図書館に売却したことがわかりました。そこでテキサス大学の方をウェブで調べたら、世界の20世紀文学の全体、有名作家の手稿・書簡や社会・文化活動の記録が、丸ごとコレクションになっていることがわかりました。世界でも日本でも、大学ランキングなど大学・研究機関の競争が激しくなっています。そこでそれぞれの大学が所蔵資料の特色を出そうと、特定分野の世界一をめざし、投資・投機を始めました。法政大学も大原社研にもっと予算をつけ前面に出して、社会問題分野の日本一から世界水準に進んでくれれば嬉しいことです。戦前・戦後のポスターデータベースなどは、海外でも評価が高いですから、十分その資格があります。ロンドンのサザビーズやクリスティーズのようなオークションでも、美術品ばかりでなく作家や政治家の書簡が売買されていますから、日本の古書店市場よりも大規模な、歴史資料のビジネスが生まれてくることでしょう。

そんな稀覯資料の一つとして、1932-33年に警視庁特高課が作り極秘の印を押された「赤化華族一覧」リストをご紹介します。もう十数年前に、当時文藝春秋編集部におられた浅見雅男さんからコピーを頂いたもので、学習院や東大に在学した華族の子弟を日本共産党が組織し、東京女子大や日本女子大まで手を伸ばして共産党員・シンパ・寄付金を獲得した状況を特高警察が極秘に調べ、詳細な「日本共産党家屋資金局五月会資金網」「組織図」及び華族子弟の関係者名簿にしたものです。ちょうど「スパイM=飯塚盈延」暗躍の頃ですから、信憑性もあるでしょう。もともと浅見さんは、編集者をしながら岩倉具視のひ孫で治安維持法違反で検挙され、保釈直後に自殺した日本女子大生・岩倉靖子の事件を研究し、『公爵家の娘・岩倉靖子とある時代』という、今は中公文庫に入っている名著の著者です。私の天皇制研究と共産党史研究のために、貴重資料を提供してくれました。

ただ、浅見さんが文春を退職されても、ご自分の華族史研究の書物で使っていなかったものから、私も石田英一郎や土方与志の研究の裏付けには使っていましたが、自分の著書・論文では言及しませんでした。その浅見雅男さんが、昨年『反逆する華族——「消えた昭和史」を掘り起こす』という平凡社新書を公刊し、そこで、この資料が岡山県立記録資料館所蔵の内務省警保局長だった「松本学関係資料」の中に入っており、国会図書館憲政資料室でもマイクロフィルムで読めるようになったとお書きになっているので、本日私も、初めて皆さんにパワポでお見せすることにしました。こんな資料が、まだまだ日本国内にも、たくさん眠っているはずですよ。

中国档案館資料へのアクセス困難

最後に史資料の空白ということで、中国・朝鮮半島など東アジアの問題を述べておきましょう。国際歴史探偵をやっていくと、ロシアを含めて、やはりヨーロッパは歴史資料を大切にし国の財産として保管し継承する伝統があるのだなあとお感します。旧ソ連の共産党や諜報機関(NKVD/KGB)でさえ、たとえ冤罪でありでっち上げ裁判であっても、一人一人の粛清の記録を一応残っていて、そのために、後に名誉回復を確認し、ご遺族に資料を渡すことができたのです。ところが、日本を含むアジアは、こうした点で非常に野蛮な国で、資料を焼いたり捨てたり、極端には中国文化大革命のように寺院や遺跡、革命軍事資料を破壊・抹殺することが繰り返されてきました。個人が勝手に公文書を所蔵し、売買したりもしています。おまけに現在の中国の歴史文書館＝

档案馆は、中国人研究者にさえガードがかたく、外国人はほとんどアクセスできません。そこで、遠回りでも史実に近づく、裏技をご紹介します。

まずは現代中国の、歴史研究の趨勢を見ておくことです。例えば『蒋介石日記』は、大国化した中国と台湾の将来、略奪・破損をおそれて、蔣家のご遺族が米国スタンフォード大学フーバー研究所に管理・公開を委託し、21世紀に入って順次公開されています。日本ではようやく家近亮子『蒋介石の外交戦略と日中戦争』（岩波書店、2012年）など研究書が現れてきた段階ですが、いまの中国では、昨年上海の大きな書店で確認しましたが、中国語の『蒋介石日記』が刊行されています。改革開放政策への転換以降、毛沢東の農民革命・文化大革命よりも鄧小平・江沢民の工業化・大国化政策が評価されて、共産党への批判は許されませんが、国民党との抗日戦争・国共合作は再評価され、内戦・建国時の「国民党狩り」の評価も変わってきました。社会主義革命よりも、中華帝国の長い伝統を再評価する動きです。

ノーベル賞選考資料、1944年延安のクリスマス

スウェーデンでは、ノーベル賞受賞者ばかりでなく最終候補者の氏名、推薦者名と評価、選考過程が、50年以上たったものは公開されるようになったというので、島崎藤村と日本ペンクラブの歴史の研究で、文学賞を調べて見ると、日本の作家は、島崎藤村を含め、川端康成が実際の受賞7年前の1961年、三島由紀夫が63年に候補に入るまで、一人も名前が出てきません。ところが中国からは、1939年に胡適、40年に林語堂と、日中戦争さなかに国民党系の有力作家が二人も最終候補だったことがわかりました。逆にノーベル文学賞候補者だったという噂のあった魯迅は、一度も最終選考に残っていませんでした。胡適はノミネートされた1939年当時、中国国民党政府の駐米大使でした。前年38年の受賞者、米国のパール・バックが強く推薦していました。翌40年ノミネートの林語堂も、キリスト教徒で中国を描いた英語の作品を発表していました。日本は、ナチス・ドイツと同盟を組みながら、1940年が皇紀2600年だということで、オリンピック、万国博覧会、国際ペンクラブ大会開催と、あわよくばノーベル賞受賞も狙っていました。軍部主導の日中戦争激化、国際的孤立のもとでの外務省・宮中勢力の外交努力といえなくもありませんが、ピント外れでした。

1939年の第二次世界大戦勃発で、国内での紀元2600年祭典・博覧会以外、国際的イベントは、すべて中止になりました。いわゆる「幻の東京オリンピック」です。重要なのは、中国蒋介石政権の抗日外交です。日独伊枢軸に対する連合軍の一翼に入るため、国際ペンクラブの中でも、ノーベル賞推薦・選考プロセスにも、いわゆるソフトパワー、抗日情報戦を仕掛け、英米ばかりかナチスに追われた亡命ユダヤ系作家たちの支持をも取り付けるのに成功しました。このような史実が分かると、現在の中国の文学界で、いわゆるプロレタリア文学・左翼作家の評価が停滞し、蒋介石や胡適の本が上海の書店に平積みされている根拠が見えてきます。

もう一枚、資料をお配りしました。終戦前1944年12月24日に、中国共産党の革命根拠地延安で開かれた、クリスマス・パーティーの招待状・出席者名簿です。これは、アメリカ市民として太平洋戦争に従軍した日系二世の自伝から見つけたものです。何が重要かといいますと、1944年のクリスマスに、アメリカ軍が抗日統一戦線を強化しよう国民党・共産党双方に働きかけ、連合軍の

武器援助独占のために洩る国民党蒋介石政権を脅迫・説得して、米国政府・軍の中国共産党訪問団、いわゆるディキシシー・ミッションが延安に入り、米軍側が毛沢東ほか共産党幹部を招待し、クリスマスのダンスパーティを開いた席に、この日系二世兵士も加わっていました。当時の米国ルーズベルト政権内部のオーウェン・ラティモアら中国派、国務省の3人のジョン（サーヴィス、デーヴィス、エマーソン）たちの後押しで、アメリカが国共合作の修復をとりもった象徴的出来事、要するに米中蜜月関係、チャイメリカChimericaの原型です。

ついでに言えば、毛沢東、朱徳、周恩来ら招待された中国共産党幹部の当時の序列が名簿からわかるほかに、中国側参加者の後ろの方に、Mr and Mrs. Susumu Okanoの名があります。延安で日本人捕虜の抗日教育をしていた岡野進＝野坂参三の当時の立場が分かると同時に、いろいろ噂のあった野坂の「延安妻」の実在まで、明らかになりました。このように、中国共産党や中国革命関係の資料は、本国档案館の資料公開の扉がなかなか開かなくても、英米文学史資料、ノーベル賞の政治学や米中交流史の方から、見えてくることのあるのです。今後の日中関係史研究には、文化交流・情報戦を含めた広い視野が必要と思われまます。

おわりに——若い世代へのメッセージ

最後に、3月末に退職される五十嵐仁教授・前大原社研所長の依頼を受けて、若い世代の研究者とアーキヴィストの皆さんへのメッセージを、簡潔に、4点述べておしまいにします。

第一に、「書を捨てずに野に出よ！」です。要するに、どんなテーマでも現場に行き第一史料にあたれ、ということです。ただし、先行研究や論点の整理なしで、いきなりインタビューしたり第一史料にあたっても、宝の山の表面を撫でるだけです。「書を捨てて町に出よう」なら寺山修司になりますが、書物を捨ててはいけません。周到で綿密な事前準備こそ、資料の山の中から真珠を見つけることにつながります。

第二に、「すべてを疑え」で、これは年配の方ならご存じでしょうが、カール・マルクスの好きな言葉です。ある問題を徹底的に追いかけていくと、その周りからいろいろ新たな問題が出てくる。その際、通説や学問的常識・公式と衝突する場面にたびたび遭遇します。そこで引き下がるのではなく、史実と資料の方から通説を疑い、新たな仮説を立てる学問的勇気を持ってほしいと思います。歴史の研究では、資料にもとづく実証ほど強いものではありません。

第三に、「19世紀機動戦・街頭戦から、20世紀の市民社会における陣地戦・組織戦へ」というのは、20世紀マルクス主義の系譜でほとんど唯一生き残った、アントニオ・グラムシのヘゲモニー論のテーゼです。私はその延長上で、「20世紀陣地戦・組織戦から21世紀情報戦・言説戦へ」と提唱しています。全くの偶然ですが、外務省に近い東京大学田中明彦さんの「権力・金力から言力政治へ」、あるいは米国民党政権の有力ブレーンであるハーバード大学ジョセフ・ナイ教授の「ハードパワー（軍事力・経済力）からソフトパワー（文化力・魅力）へ」という外交理論とも重なります。つまり、歴史研究、資料収集・発掘も、情報戦の一部で民衆の新しい歴史認識を創造する営みだという自覚を持って、ということです。

一つだけ例を挙げれば、ウェブ上の辞書Wikipediaの活用の仕方です。学生のレポート試験のコ

ピペ答案によく使われるため、学界・教育界の評判は悪いですが、私は、これは民衆が作る百科事典になりうるものであり、特に今や各項目数万人の参加とチェックで日々内容が更新される英語版 Wikipediaは、エンサイクロペディア・ブリタニカやアメリカーナよりも、読者数と信頼性を増していると評価しています。特に、自分の研究テーマとの関係では、事象の評価でも人名・団体名でも、必ず各国語版Wikipediaを比較するよう、お勧めします。地名で「日本海」の表記が韓国の「東海」と対立するように、各国・各言語の主題に対するアプローチと重要度の違いが、記述の内容ばかりでなく、記述分量・頁数からも分かります。

第四に、上記の問題と密接に関わりますが、私たちの住む「日本」自体が歴史的に形成された「想像の共同体」であり、私たちの思考は、その内部でのみ通用する日本語によって媒介されていることの、意味と限界の自覚です。自画像と他者感覚、記憶と記録、中心と周辺、鳥瞰図と虫瞰図、社会構成主義といった、カルチュラル・スタディーズや表象研究からの問題提起は、大いに学ぶべきです。ただし、外国で第一次史料にあたると痛感することですが、私たちが日本語の基本資料で学んだ事件や公式声明・協定などのイメージが、英語やドイツ語で読むと、微妙にニュアンスが異なることがよくあります。古くはポツダム宣言のsubject to、最近でもダボス会議の安倍首相発言や日米共同声明の解釈に、通訳と翻訳が介在して、国内イメージと対外発信がずれることがよくあります。21世紀の日本近現代史研究では、日本語だけの研究は肩身が狭くなり、一人一人の世界への発信力が、不可欠になるでしょう。

（かとう・てつろう 一橋大学名誉教授・早稲田大学大学院政治学研究科客員教授）